
東方物語。

睡魔

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方物語。

【Nコード】

N4711Z

【作者名】

睡魔

【あらすじ】

幻想郷。様々な命が混じり合う理想郷。

そんな世界に一つの命が新たに混じり込みました

。

第一話

幻想郷。

それは人だけではなく、妖怪や妖精や神などが互いに混じり合い、出来ている理想郷。

遙か昔、山奥に存在していた『幻想郷』はとある事情で結界により隔離された。

それによつて、『外の世界』からは幻想郷を認識することができず、それと共に幻想郷から『外の世界』も認識できなくなった。

向日葵が咲き誇る場所。

人間達が太陽の畑と呼んでいる場所に彼女は居た。

薄緑色の髪に、太陽の光から彼女を守る白い傘。

彼女はゆっくりと歩きながら向日葵を見守っている。

異変は突然であつた。

幻想郷の午後。

彼女が向日葵を眺め、愛でていると空から人間が『降つて』きた。

妖怪 又は、一部人間 が空を飛ぶのも空から落ちるのも珍しく無い幻想郷で、こんな場所に一人で『降つて』きた人間。

このまま落ちれば、怪我をするかもしれない。

それでもこの幻想郷にいるのならある程度は頑丈に出来ている為、命の危険は低いであろうし、落ちたとしてもあの速度なら大した怪我はしないだろう。

実際、彼女もそう考えた。

ただ、落ちるだけなら。

その人間は不幸であった。問題は落ちる事ではない。
落ちた場所であった。

場所は彼女が向日葵を愛でていた場所より、少し奥。
つまり、太陽の畑の真ん中であつた。

ドサリ、と人間が落ちた音が太陽の畑に響く。

周囲を飛び回り遊んでいた小さな妖精達はこれからの惨劇を予想したのか、本能なのか。
その場を離れた。

刹那、太陽の畑の真ん中 正確には落ちた人間 に圧倒的な殺気が放たれた。

その人間のもう一つの不幸は向日葵を愛でていた彼女が、『彼女』であつた為だつた。

『彼女』 風見幽香は花の妖怪である。

その事実だけを聞けばほのぼのとした優しい妖怪に聞こえるかもしれない。

そしてそれが事実か？と聞かれれば彼女を知っている者ならばこう答えるだろう。

断じて、否。

普段は紳士的な態度で、礼儀正しい女性であろう。それは事実だ。だがしかし、相手が彼女の認めた強者や花を荒らした者であるならば話は別、真逆と言ってもいいだろう。

笑顔で相手を追い、圧倒的な暴力で敵を××する。日課は虐め。そんな妖怪なのだ。

つまり、この向日葵を荒そうとする命知らずでとてつもない愚か者がいるならば彼女はその圧倒的な力で愚者を××するだろう。

そして、少なくともこの人間が降ってきたのは向日葵達が咲いているこの場所だった。

彼女は大事な花を潰したであろう者を同じように潰し、粉碎しようと人間へと凄まじい速度で飛びかかった。

人間の少年へと一瞬で肉薄した彼女は白い傘を振り上げ、少年へと

しかし、少年の身体が吹き飛び、生を終わらす音は訪れなかった。

「え……？」

すう、すう。と穏やかな呼吸を繰り返している少年は向日葵に包まれて気絶していた。

そう、向日葵に『包まれて』いるのだ。

年が『降って』来たこの場所にあった向日葵は潰されることは無かった。

それどころか落ちてきた少年を守るように向日葵たちは少年を囲い、包んだ。

少年を守る様に、少年に寄り添う様に。少年を中心に一つの世界を作り上げた。

「ふ、ふふっ……」

らしくない。彼女は思った。

嗚呼、認めよう。傘を振り下ろせなかった理由を。

少なくとも私は確かにこの光景を見て、少年に興味を持った。花以外にも興味を持つなんて、本当に、らしくない。

でも。

風見幽香は微笑んだ。

「いいわ、私は貴方に興味が沸いた。だから早く起きなさい」

私を待たせるなんて、駄目なのだから。

彼女は少年を抱えるとゆつくりと、歩いていった。

第二話（前書き）

お気に入り登録をされた方がおられた様なのでここでお礼を。
このような作品を読んで頂きありがとうございます。
更新は不定期ですが、楽しんでいただけると幸いです。

第二話

身体が、軽い。

あれ程までに重かった体も、心も。

今は感じることは無い。

漠然とした意識の中、彼は思う。

（俺、死んだ、のかな……？）

雨に打たれ、貫かれた傷口から流れ出た血液。
瞬く間に奪われていった体温。

7

それはもう遙か遠くの事に思えた。

しかし確かにそれは彼の身体に刻みつけられて、忘れることはない。
実際に、今思い出せば身体が震えるかもしれない。

だけれども　　今、は。

何かが、近くに居てくれる。

誰かが寄り添っていてくれている。

そんな訳、無い。

今まで、そんな事なんて一度も無かったハズなのにな。
でも。

今はその気のせいでも良いから。
じぶんの、そばに。

誰かに引き上げられるように、目覚めた。

ここは、どこだろうか。

眩しい光に視界を奪われ、一瞬閉じた目をもう一度開こうと試みる。

「あら、起きた？」

ぼうつ、とする意識を無理矢理に目覚めさせるとそんな声が聞こえた。

眩しくて開けるのが億劫だが、なんとか開いた目で声の主を探す。

居た。

座っている自分の横に立っている女性は屈むと顔を覗いてくる。
薄緑の髪に白い肌。

「綺麗……」

「そう、ありがとう」

思わず呟いた言葉に彼女は微笑む。
ふわり、と吹いた風に漸く意識が覚醒した。

「えっと…、ここはどこ？」

「ここは…。そうね、太陽の畑と呼ばれているわ」

「太陽の畑……」

見回すと一面の向日葵の花。
夕日を浴びて、紅く輝く向日葵はとてつもなく綺麗で。
嗚呼、と納得した。

「良い場所だなあ……」

「でしょう？私も良くここに来るのよ」

「へえ……」

彼女は紅く染まった向日葵見ながら嬉しそうに微笑む。

自分の好きな場所を褒められたらやはり、嬉しいのだろう。

「そうそう、あなたの名前は？」

俺の、名前。

咄嗟に出てこなかったのは忘れた訳じゃない。

ただ単に、思えば長い間使われたことが無かったんだなあ……と事実を再確認した自分に苦笑いしてしまう。

「俺の名前は……うん、彩風春兔。名字でも名前でもどっちでも」

「あやかぜ、はると……そうね、ハルトで良いかしら？」

「……っ。うん、構わない」

名前を呼ばただけで、こんなにも嬉しく感じるなんて。

単純だなあ、と思う事で湧き上がる恥ずかしさを無理矢理隠した。

「じゃあ……君の名前は？」

そう、彼女の名前。

久しぶりに話せたからか、話してくれたからか、分からない。

でも彼女の名前を求めている自分が居た。

「私は、風見幽香。幽香とでも呼んでくれれば構わないわ」
「かざみ、ゆうか…。わかった、じゃあ幽香で」
「ええ」

互いに何も言わずに手を差し伸べて握手。
久しぶりの人肌はとても温かった。

手を離すと彼女、いや幽香と目が合う。
本当に、久しぶりだ。

「そうだ、ハルト。どうしてこんな所に落ちてきたの？」
「え……？」

落ちて、きた？

「えっと…」
「……ハルト、もしかして気付いたらこの場所にいたの？」
「あ、うん。どうしてこの場所に…ってより、落ちてきたってどう
いう…」
「言葉通りよ、私が向日葵を愛でていたら空から貴方が落ちてきた
のよ」

どういうことだろうか。
空から落ちてきた…ねえ。
少なくとも自分の記憶では俺は。

「っ…！」
「？」

「い、いやなんでもない。でもどうして落ちてきたのかは分からないかな」

「ん…そう。ありがとう」

「気にしないでいいよ」

思い出したことで身体が僅かに震えるが、耐える。
大丈夫なんだ。今は違うんだ。と己に語りかける。

その僅かな変化に幽香は気付いたのかは分からないが、それ以上言及してこなかった。
そして、別の質問。

「じゃあ…ハルト。貴方、幻想郷って知ってるかしら？」

「『幻想郷』……？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4711z/>

東方物語。

2011年12月16日21時51分発行